鸕野皇女の生涯

松下宗彦

一　出生

鸕野皇女（後に41持統天皇）は、大化元年（六四五）に生まれた。

この年は、彼女の父中大兄皇子（後に38天智天皇）が命運を賭けたクーデターを決行、宮中で蘇我入鹿を殺し、大化の改新政治のスタートを切った記念すべき年であった。

中大兄の父は34舒明天皇（30敏達天皇の孫、六四一崩）、母は宝皇女（35皇極天皇、クーデターで退位した。30敏達天皇の曾孫）、皇極のあとを継いだ孝徳天皇の姉である。この大化元年に姉から弟への皇位継承が行われたことを記憶しておきたい。

鸕野皇女の母遠智娘（造媛（みやつこひめ）ともいう）は、蘇我倉山田石川麻呂の娘である。クーデターを成功させるために、中大兄が取り結んだ政略結婚とみられる。現に石川麻呂はクーデターの席で一役を演じ、改新政治では右大臣の要職に登用されている。鸕野皇女には姉の大田皇女がいるので、中大兄が遠智娘を召したのは、クーデターの二、三年前と推察される。企てがその場の思いつきでなく、十分に時間をかけて練られたものであったことが、このことからもわかる。

鸕野皇女の生まれた六四五年に、中大兄皇子は数え二十歳（注1）、父と彼女の年の差は十九である。

皇太子中大兄には、二人のライバルがいた。その一人は、蘇我系の異母兄古人大兄皇子で、「大兄」の称は、「中大兄」にまさる。クーデターの場から私邸へ逃げ帰り、まもなく出家して吉野にこもったが、この年十一月、謀反の密告があり、中大兄は兵をやって討たせた。ライバルのあと一人は、時の天皇孝徳帝の皇子有間で、六歳の少年ではあるが、その母の父が左大臣阿倍倉梯麻呂で、予断を許さない形勢であった。

時の政府は、天皇と左大臣、皇太子と右大臣の二系統があり、双方と良い内臣の中臣鎌子がつなぎの役をつとめていたようである。

鸕野皇女の母遠智娘にもライバルがいた。左大臣阿倍倉梯麻呂の娘、橘娘がそれで、どちらが先に男子を生むかに勝負がかかっていた。そのころ、遠智娘の妹姪娘も中大兄に召されたが、姉をおびやかす存在とはならなかったようである。（後に、中大兄の子御名部皇女と阿閉皇女を生んだ。御名部皇女は40天武天皇の子高市皇子に召されて長屋王を生み、阿閉皇女は天武と持統の子草壁皇子に召さ

れて、氷高皇女と軽皇子を生んだ。阿閉皇女は後の43元明天皇、氷高皇女は後の44元正天皇、軽皇子は後の42文武天皇で、奈良王朝は文武系で占められた)

だが、中大兄は若く、遠智娘のライバルが新しく出てくる可能性があった。

二　母の実家の没落

クーデターのあった六四五年十二月に、都は大和の飛鳥から摂津の難波(今の大阪市)にうつされた。

改新政治は、かけ声勇ましくスタートしたが、中大兄皇子と他の人物たちとは革新の熱度に開きがあった。

大化三年(六四七)に、新しく七色十三階の冠位が制定された。ところが、古い冠位の停止された大化四年四月に、左右の大臣は、なおも古い冠をつけた。中大兄の怒りが察せられる。だが中大兄には、二人を咎める威力はなかったようである。天皇側の左大臣はそれとして、二人の妃(遠智娘と姪娘)の父として、中大兄皇子と一体であるはずの右大臣蘇我倉山田石川麻呂が、改新に抵抗の姿勢を示したことが、中大兄の心をいたく傷つけたことは疑えない。

中大兄は伊賀采女宅子との間に、この年(大化四、六四八年)大友皇子をもうけた。男子の出生が、中大兄の心理に何かの影響を与えたことも考えられる。

大化五年(六四九)三月十七日、左大臣阿倍倉梯麻呂が死んだ。その二十四日、蘇我石川麻呂は、中大兄の暗殺を企てていると密告された。天皇の御前で申し聞きしたいと願って許されず、大和の山田寺へのがれ、そこで心静かに自殺した。「願はくは我、生生世世に、君王を恨みじ」と仏に誓っての死であった。

石川麻呂に組したとして、死罪二十三名、流罪十五名が刑を執行されたが、やがて、石川麻呂に叛意のなかったことが表われた。(注2) 石川麻呂の資材を没収したところ、良き書には「皇太子の書」と記してあり、重宝には「皇太子の物」と記してあったからである。それを知って、皇太子中大兄は後悔して、いたく歎いたといわれる。ともかく、改新に非協力的な左右大臣が、わずか十日足らずで世を去ったことは事実であった。また、石川麻呂とその与党の潰滅で、鸕野皇女の母遠智娘が、それまで誇りとしていた実家を喪失したことも事実であった。

この年、鸕野皇女は数え五歳であった。

遠智娘は、夫の中大兄皇子によって父を殺され、そのため心を傷めて、やがて病死した。中大兄は、その死をいたく悲しんだ。野中川原史満が中大兄の心を歌に作って献上した。

山川にをし二つ居てたぐひよくたぐへる妹を誰か率にけむ

本ごとに花は咲けども何とかも愛(うつくし)妹がまた咲き出来ぬ

中大兄は「よきかな、悲しきかな」と言って、琴を授けて歌わせ、ほうびの品々を満に与えた。

遠智娘の死は、父の石川麻呂が抹殺された年の内ではない。その後も中大兄の愛を受け、白雉二年(六五一)に鸕野皇女の弟建王を生んだ。彼女の死は、その後まもなくと想像される。鸕野皇女は、数え七、八歳で母を失なった。

父の中大兄皇子には、すでに、伊賀采女宅子に生ませた大友皇子(六四八——六七二)があり、母の素姓ではまさるものの、建王の前途は容易ではないようだった。しかも、生長するにつれて、建王

は唖であることが判明した。

中大兄の母宝皇女は、この孫をひどく可愛がった。同時に、その姉たち（大田・鸕野）の力にもなってくれたらしい。また、姉の遠智娘と共に中大兄の妃となっていた姪娘も、彼等の力になったとみえて、後に、鸕野皇女がその厚意に応えている。

一方、政局も多難の度を加えた。石川麻呂抹殺のあと、左右の大臣が任命されたが、二流の巨勢・大伴両氏からの採用で、邪魔にならない代わりに、大して役にも立たなかった。そして、これまでの天皇左大臣と皇太子右大臣の対立が、天皇と皇太子の他者をまじえぬ対立となって激化した。孝徳天皇の皇后間人（はしひと）大后は中大兄皇子の同母妹であったが、彼女は夫よりも兄に従うタイプのようであった。

白雉四年（六五三）、中大兄は、都を難波から元の飛鳥へもどすことを提案したが、天皇は許さなかった。中大兄は、先帝（35皇極）・皇后・百官の人どもを率いて、飛鳥遷都を強行した。皇后まで連れ去られた天皇は、次の歌を皇后に送った。

かなきつけ吾が飼ふ駒は引き出せず吾が飼ふ駒を人見つらむか

翌白雉五年（六五四）孝徳天皇は憂悶の中に崩じた。孝徳の遺児有間皇子（十五歳）が中大兄皇子に含むところがあったとしても不思議ではない。

孝徳天皇のあとには、その姉宝皇女（元の35皇極天皇、中大兄の母）が立った。

朝鮮では、新羅が唐と交わりを深め、半島の統一を狙う動きを見せはじめた。日本としても警戒を要する事態となってきた。

三　結婚

斉明三年（六五七）に、鸕野皇女は、父の同母弟大海人（おほしあま）皇子の妃となった。鸕野かぞえ十三歳、大海人二十七歳（注3）――十四歳も年の差のある結婚であった。まして、鸕野の同母姉大田皇女がすでに大海人に召されていた。姉の下風に立って同じ夫に仕える立場に、鸕野は結婚の当初から立たされていたのである。

鸕野皇女を召したとき、夫の大海人には、すでに二人の子がいた。一人は、額田王との間に生まれた十市皇女（六六九年に大友皇子の子葛野王を生んだことから逆算して、少くとも六、七歳には達していたようである）で、他の一人は胸形（宗像）君徳善の娘尼子娘に生ませた高市皇子（六五四――六九六）四歳であった。

鸕野皇女の新婚生活の暗さが思いやられる。

結婚の翌年（六五八）五月、鸕野の同母弟建王が唖で口がきけないまま八歳で没した。祖母の斉明天皇が哀悼の歌を五首も残し、いずれ自分の陵に合葬するようにと命じた。

この年十一月、中大兄皇子は、蘇我赤兄を用いて、謀略でライバルの有間皇子（十九歳）を誅殺した。赤兄は、以後重用され、その娘が中大兄と大海人に召されるようになった。中大兄に召された常陸娘は山辺皇女（後に天武の子大津皇子の妃となり、夫に殉じて死んだ）、大海人に召された大蕤（おおぬ）娘は穂積皇子と二人の皇女を生んだ。

斉明七年（六六一）正月、朝鮮出兵を指揮するため、斉明天皇・中大兄・大海人ら宮廷の首脳が難波から海路北九州へ向かった。途中大泊海（今の岡山市の近く）で、鸕野皇女の姉大田皇女が大海人の子大伯皇女を生んだ。額田王が「熟田津に船乗りせむと月待てば

潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（万葉集巻一、八）」を発表したのも、この航路での事であった。

（額田王をめぐる中大兄と大海人の摩擦に言及する説があるが、額田王が采女的な存在であったとすれば、通い婚――はじめ大海人が通って十市皇女をもうけ、後に中大兄が通ったと見れば、それは禍根を残すような問題ではなくなる）。

西航の年の七月、斉明天皇が崩じた。皇太子中大兄は称制して、朝鮮での作戦を指揮した。

天智元年（六六二）、鸕野皇女は草壁皇子を博多で生んだ。

天智二年（六六三）、鸕野の姉大田皇女が大津皇子を生んだ。この大津の名も、博多の大津宮で生まれたことによるようである。

二人の夫大海人皇子が博多に在り、二人の妃が夫に同行して博多にいたことがわかる。

母の気質が子に伝わるものとするならば、豪放な大津皇子の母大田皇女は、やはり気性の激しいタイプのように思われる。とすると、鸕野皇女は、いつも気性の激しい姉の下にいて、共通の夫大海人に仕えていたことになる。

大津皇子が生まれた天智二年（六六三）八月、日本の水軍は、新羅・唐の連合水軍と、朝鮮の白村江で戦って完敗――朝鮮から閉め出された。同年、日本の与国百済が滅亡した（高麗も六六八年滅亡）。――日本は、逆に攻められる危険を感じ、防人・烽（とぶひ）・水城など防備を整える必要に迫られた。

没した記事はないが、天智紀六年（六六七）二月二十七日の項に、大田皇女を葬ったことがしるされている。鸕野皇女二十三歳、大田の遺児大伯皇女七歳、大津皇子五歳であった。

この年（六六七）、鸕野の父中大兄は、都を近江大津に移した。翌天智七年（六六八）即位、異母兄古人大兄皇子の子倭姫王を皇后に立てた。孝徳における間人皇后と同じく、皇后は皇族からという方式を踏んだかに見えた。天智と倭姫王との間に子は生まれず、孝徳と間人の間に子がなかったのと似ている。天智は、六四五年に、倭姫王の父古人大兄を謀叛のかどで殺しており、倭姫王との間に温かい交情があったか、どうか疑わしい。夫が父の仇という点では、鸕野皇女の亡き母蘇我遠智娘も、倭姫王皇后と同じ場にいて自滅の道をたどったのであった。

鸕野の父天智天皇のみ子の内、大友皇子は二十一歳となり、『懐風藻』にしるされた漢詩から見ても、知能すぐれた若者であることがわかる。

天武紀即位前紀によると、鸕野の夫大海人皇子は、天智の同母弟であることを重視されて、天智即位の年に、皇太子に立てられている。26継体天皇以来の皇位相続を見ると、継体のみ子三人（安閑・宣化・欽明）が相次ぎ、欽明のみ子（敏達・用明・崇峻・推古）の四人がきょうだい相続であり、皇極・孝徳・斉明の移行も、重祚を含みながらも姉弟相続である。二十六代継体天皇から三十八代天智天皇までの十二例の内、子への継承三例に対してきょうだいへの皇位継承が七例の過半数を占めていることから見れば、大海人皇子の立太子は自然の成行きであるが、このことが天智紀にしるされていないことが、一つの謎である。ただ、大海人皇子は『万葉集』の巻一、二一の題詞にも皇太子と書かれており、この題詞が書かれた時期が『日本書紀』の成立（七二〇年）より以前と推定されることから、私は、大海人の立太子を認めてよいと考える。

弟へよりも実の子に皇位をゆずりたいのが人情だが、内政の革新に燃える天智は、大海人を皇太子に立てることによって、当座の安定を求めたことと思われる。

天智の即位前後に、大海人と額田王との間に生まれた十市皇女を、天智はわが子大友皇子の妃に迎え、六六九年に葛野王（――七〇五）の誕生を見た。天智の額田王への通い婚は、このころのことと思われる。

大海人皇子のみ子高市皇子も婚期を迎え、天智のみ子御名部皇女を妃とした。御名部は、鸕野皇女の母遠智娘の妹姪娘の子で、鸕野のいとこであり異母妹にもあたる。

これらの近親婚は、いずれも政略結婚の雛型ともいうべきものであった。つまり、事と次第によっては、手軽に突き崩せる砂上の楼閣に似たもろさを内蔵していたのである。

天智の近江朝では、有間皇子を始末した蘇我赤兄が勢力を伸ばし、中臣鎌子（後の藤原鎌足）をしのぐ勢いがあった。赤兄は、すでに述べたように天智・大海人に娘を縁づけ、それぞれみ子が生まれた。それに対して、天智は、鎌子の娘を召さず、大海人の方が、鎌子の娘二人（五百重娘と氷上娘）を召し、五百重に新田部皇子、氷上娘に但馬皇女（穂積皇子への悲恋で知られている）が生まれている。

近江遷都の二年後、天智八年（六六九）十月、中臣鎌子が没した。五十六歳。天智は、病床に皇太子大海人を遣わし、大織冠と内大臣の位を与え、藤原氏という姓も与えた。大織冠は、天智三年（六六四）に制定した冠位二十六階の第一階で、まもなく左大臣を拝命した蘇我赤兄でさえ、第七階の大錦上どまりであった。とび抜けた栄誉は、現実性に欠ける。『日本書紀』が成立した養老四年（七二〇）には、鎌子の子藤原不比等が左大臣欠員の右大臣の席にあり、この年没して太政大臣を贈られた。不比等が政局の最上席にいたときに編さんされた書物に、その父の栄誉が誇大にしるされるのは在りうることで、後世にも子が父を誇大にしるした例がある。私は、少なくとも大織冠、あるいは、内大臣にも虚構の疑いを抱いている。

すでに述べたように、姻戚関係から見ると、鎌子は大海人皇子に近い。鎌子の死は、天智よりも大海人に痛かったように、私は判断する。天智には、蘇我赤兄という年来の腹心が残っている。

鸕野皇女は、夫の大海人と父の天智との微妙な成り行きを見守りつつ、六六二年に生まれた独り子の草壁皇子の生長を待つ状態にあった。

四　父の死・大乱

天智十年（六七一）正月、天智は、み子の大友皇子を太政大臣に、蘇我赤兄を左大臣に任命して、政府の強化を計った。

絶え間ない激務が天智の身心を疲労させたとみえて、このころから、天智の行動は中大兄時代の鋭さを欠くようになった。

この年、秋の末から天智は病みついて、回復の望みが絶えた。天智は、皇太子の大海人を病床に呼び寄せ、皇位を継ぐように言った。大海人は辞退して、即日出家して大和の吉野へ去った。そして、その年の十二月、鸕野皇女の父、大海人皇子の兄天智天皇が多彩な一生を閉じた。御歳四十六歳。鸕野皇女二十七歳。近江の大津京には、天智のみ子大友皇子と蘇我赤兄らが居て、大海人皇子との

対立は避けがたかった。

翌六七二年（壬申の年）六月、大海人皇子は吉野を脱出して伊勢・尾張へ向かい、兵を挙げた。妃の鸕野皇女も同行した。

畿内をゆるがせた壬申の乱は、約一月で大海人が勝利をおさめ、大友皇子は敗軍の中で自殺した。(注4) 大友皇子は、天武の娘十市皇女の夫であり、仲に葛野王（四歳）も生まれていた。また、大友皇子は、鸕野皇女の異母弟でもあった。権力の座を求める者の最大の敵は肉親だということができる。

翌六七三年二月、大海人は即位して鸕野皇女を皇后に立てた。大津京政府の左大臣蘇我赤兄を斬らずに、配流ですませた温情、大友皇子に最後までつき従った物部麻呂の誠実さを認めて登用した度量――などで、争乱のあとの人心を巧みに鎮めて行った。（赤兄は大海人の妃大蕤娘の父なので、妃の悲しみを見通して殺さなかったと見られる。中大兄における蘇我石川麻呂の処分と逆うことに目を留めたい。物部麻呂は、やがて石上麻呂の名で活躍、七一〇年の奈良遷都には、左大臣として、43元明天皇・知太政官事穂積親王をたすけた）。

天武天皇は、天智のみ子たちを大切にした。壬申の乱のあとかと見られるが、天智のみ子大江皇女と新田部皇女を妃に迎えた。太田・鸕野に加えて、さらに二名も天智の姫を召したことが、天智・天武非兄弟説の一因となっている。

天武は、内政を整備して辛棒強く実力を身につけて行った。

天武八年（六七九）五月、皇后（鸕野）と六人の皇子を従えて吉野宮へ行き、長い平和のために一同が助け合うことを誓った。天皇と皇后、六人の皇子は、天武の子草壁・大津・高市・忍壁、天智の子河嶋・芝基（志貴）――同母の兄弟が一組もない多様な六名であった。誓うにあたって、天皇は襟のひもを解いて六人の皇子を上衣の中に抱きしめ、皇后も天皇にならって、六人を上衣の中に抱いた。――この誓いは、七年後に破られた。

この六名の皇子の内、天武の子には天智の姫、天智の子には天武の姫――六組のいとこ同志の結婚を見ることができる。天智の娘である鸕野皇后からみれば、夫の子と異母妹との結婚が四組あることになる。

天武は、二年後の六八一年、鸕野皇后との間に生まれた草壁皇子（二十歳）を皇太子に立て、翌々六八三年、鸕野の亡き同母姉大田皇女との間に生まれた大津皇子に朝政を聴かせた。大津皇子は、『万葉集』と『懐風藻』に歌と詩を残し、その才能の豊かさを示している。『懐風藻』の伝記には、撃剣の達人で剛気に富む青年の姿が生き生きと述べてある。鸕野の同母姉の子であるため、母の生前には草壁皇子より上位に扱われたようで、亡き祖父天智天皇にも愛されたと『日本書紀』にしるしてある。

鸕野皇后は、わが子草壁のライバルに心を痛めることになった。

天武天皇は、新しく八色の姓を定め、諸豪族の勢力を整理した。蘇我・物部の名号を奪い、蘇我には石川、物部には石上を名告らせた。その他、国史の編さん、内政の整備を進めていたが、六八五年健康を害し、天武十五年（六八六）九月九日に崩じた。御年、五十六。鸕野皇后四十二歳。草壁皇子二十五歳。大津皇子二十四歳。

五　夫の死・大津処刑・草壁の死・即位・藤原遷都

天武天皇崩御の直後、摂政大津皇子の謀反が表われた。『懐風藻』

によれば、皇子河島（河嶋）の密告で知れたという。皇后は、大津皇子に死を賜い、大津の妃山辺皇女が大津に殉じて死んだ。大津に連座した者に死罪がなかったことから、大津謀反は抹殺の口実であろうとの謀略説が強い。鸕野皇后・大津・河嶋――この三人は、七年前の吉野宮における誓いに加わった者である。

鸕野皇后の願いは、わが子草壁皇太子が皇位を継ぐことであったに違いない。しかし、大津皇子抹殺の直後では、さすがに露骨すぎた。年を待つ内に、持統称制三年（六八九）、皇太子草壁皇子が没した。妃は、鸕野の母の妹姪娘の娘、鸕野の異母妹でもある阿閉皇女（661―721。後の43元明天皇）、二人の間の子は、氷上皇女（680―748。後の元正天皇）十歳と軽皇子（683―707。後の42文武天皇）七歳であった。

翌持統四年（六九〇）元日、鸕野皇后が即位した。四十六歳。壬申の乱の中でさえ、夫の大海人と同行して運命をともにした鸕野は、乱の平定後も、天武の内政を助けてきた。その経験と、軽皇子の成人即位までがんばろうという気力で、鸕野は藤原遷都・律令の制定などに力を尽くした。即位の年の四月に太政大臣に登用した高市皇子がよく持統を助けた。

高市皇子は、天武と地祇の宗像系の母から生まれ、壬申の乱には十九歳で戦闘を指揮して功があった。持統天皇の母の妹姪娘の娘御名部皇女をめとり長屋王（684―729。後に左大臣。七二九年、計られて賜死）が生まれたが、他の妃のことでは運がなかった。壬申の乱で夫の大友皇子を父に討たれた十市皇女（異母姉）を引きとったが、天武七年四月に急死、高市皇子は哀悼の挽歌を『万葉集』巻二、一五六――一五八に留めている。また、異母妹但馬皇女をめとったが、但馬は異母兄穂積皇子を熱愛して世評にのぼった。但馬皇女は天武と藤原氷上娘との間に生まれたが、六八二年幼くて母を失なった頼りなさから、感情がつのったらしい。穂積皇子は、後に奈良遷都に知太政官事として文官の最高位で遷都の重責を果たした有能な人物で、但馬皇女に溺れるまではいかなかったようだが、三人三様の深い苦悩があったことと推察される。穂積皇子は六九一年に封五百戸を加封されている。そのころ成人したらしい。高市皇子の死が六九六年。――但馬皇女の事件は、六九一年――六九六年の間とみられる。

持統天皇は、内政を整え、六九四年には藤原宮へ都を移した。また、吉野への行幸をくりかえし、持統四年と七年には年間各五回の行幸を重ねている。吉野の宮滝には温泉が湧くので、湯治が目的だったかも知れないが、やはり、夫と共に此処に雌伏したときの思い出もなつかしかったのであろう。『日本書紀』と『続日本紀』によると、吉野へは在位のときの行幸三十回、譲位後の行幸三回を数えることができる。

『万葉集』巻二、一六二の題詞に、「天皇崩りましし後、八年九月九日、奉為に御斎会せし夜、夢のうちに習ひ賜へる御歌一首」とある。九月九日は、持統天皇の亡き夫天武天皇の命日である。崩じて丸八年立った命日に亡き夫へ呼びかける歌を夢の中でよんだ持統の思いの深さに、私は感銘を覚える。

巻二、一六二を左にしるす。

明日香の　清御原の宮に　天の下　知らしめしし　やすみしし
わが大君　高照らす　日の皇子　いかさまに　おもほしめせか
神風の　伊勢の国は　沖つ藻も　なみたる波に　潮気のみ　か

をれる国に　うまごり　あやにともしき　高照らす　日の御子

訥々とした素朴な語調に、亡き人を恋う心の切なさを汲み取ることができる。

六　高市の死・譲位・鸕野の死

持統十年（六九六）、太政大臣の高市皇子が没した。

天皇は翌十一年（六九七）、草壁の子（持統の孫）軽皇子（十五歳）を皇位につけ（42文武天皇）、自分は太上天皇の称を初めて用いた。時に鸕野五十三歳。

天智・天武・持統の三帝が手がけてきた律令の制定も目度がたち、大宝元年（七〇一）に撰定を終えた。

鸕野上皇は昔から地方行幸が好きで、吉野宮だけでなく各地へ出かけたが、大宝二年（七〇二）十月、初冬の三河国行幸がきつかったらしい。その年の十二月二十二日に崩御した。御年五十八。

遺骸は翌大宝三年（七〇三）十二月に火葬、亡き夫天武天皇の眠る大和国高市郡檜隈の大内陵に合葬された。

大内陵は嘉禎元年（一二三五）に盗掘の難にあった。御陵の内部は荒らされ、鸕野上皇の火葬骨を収めた銀の箱は盗み出されて路頭にすてられた。(注5)

注1　中大兄（天智天皇）の生年には諸説がある。ここでは、舒明紀十三年（六四一）十月十八日に十六歳で誄したことに拠り六四五年に二十歳とした。父と、成人に達した長子との年の差を見ると、草壁皇子と元正天皇との差が十八歳、文武天皇と聖武天皇との差が十八歳、聖武天皇と孝謙（称徳）天皇との差が十七歳である。中大兄とその次女鸕野との年の差が十九歳というのは、右の例から見て妥当と思われる。

2　叛逆を企てたとして抹殺された者が無実とわかったという記述は珍しい。『日本書紀』を編さんした時の44元正天皇が石川麻呂の娘姪娘の孫であることからの配慮かもしれない。

3　大海人（天武天皇）の生年にも諸説がある。ここでは注1の立場を貫いて、中大兄より五歳年少とする。

4　大友皇子は、『日本書紀』では天皇に列せられていない。明治三年（一八七〇）七月二十四日、三十九代弘文天皇と追諡された。

5　森浩一著「古墳の発掘」八―一八ページ。

（本学教授）